

瀬戸内海北岸における弥生セトルメントシステム

酒 井 龍 一

はじめに

本稿は、瀬戸内海北岸に所在する多数の弥生遺跡のなから、各地域の拠点集落（『中心集落』の可能性が考慮される遺跡を抽出し、その分布状況（位置・数・配列・間隔・その他）を概観することにより、当該地域の初期農耕社会形成期におけるセトルメントシステムを仮説モデルとして構成するのが目的である。

この仮説モデルはその是非の検討が不可欠であり、さらに合理的なモデルが再構成されるべきである。

弥生セトルメントシステム全体の構成

ほぼ西日本全体に相当する弥生セトルメントシステム（高位）は、複数のサブシステムとしての広域システム（中位）とそれらを結ぶ連続線により基本的に構成される。

各広域システムはまた複数の地域システム（下位）とそれらを結ぶ連続線で構成される。地域システムは、各小地域で中心となる継続的で大規模な拠点集落（中心集落）の集合により構成される。そして各拠点集落の周囲には、より小規模・より短期間、あるいは特定機能の諸集落が所在し、最小単位としての基礎地域システムを構成する。

本稿では、このうち瀬戸内海北岸広域システムとそれを構成する八箇所（A/H）の地域システムをとりあげる。

なお既に近畿中央部広域システムについては、拙稿一九八四年「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報第三集』（奈良大学文化財学科）でとりあげており、参照していただきたい。また北部九州・日本海沿岸・四国北岸・伊勢湾沿岸等の広域システムについては、引き続き提示していくことになる。

拠点集落遺跡

瀬戸内海北岸における弥生時代の諸遺跡で、拠点集落としての可能性が現時点で考慮されるものは、次のとおりである。

東奈良・森小路・大里・摂津加茂・宮の前・田能・勝部・武庫
 荘・本山・楠本荒田町・新方・玉津田中・家原堂の本・東溝・東
 神吉・東中・小山・今宿丁田・辻井・丁柳ヶ瀬・常全門前・新宮
 宮内・野田・船山・門田・雄町・百間川・津島・南方・原・京
 免・一丁田・追入上東・酒津・真壁他・大宮・亀山・ザブ・松江
 下垣内・助平1号他?・塚迫青木原・中山・太田川放水路・高井
 利松・大円寺山・宮原福寺・奥正権寺等・中郷・下東・吉田・亀
 山・馬場杖抜・坂手冲尻惣の尻・目等 以上、五十五個所を数え
 る。

拠点集落の配列

拠点集落の分布には、面的分布と線形的分布の基本的な二形態がある。
 瀬戸内海北岸における五十五個所の拠点集落遺跡は、基本的に七本の
 線形的分布を形づくる。七本の内訳は、瀬戸内海北岸に沿って長くのび
 る一本の幹線A、およびそこから枝別れし海岸に直行して内陸へのび

る六本の枝線B・C・D・E・F・Gがある。

幹線A

勝部―田能―武庫荘―本山―楠荒田町―新方―玉津田中―
 東溝―東溝吉―小山―丁柳ヶ瀬―常全門前―野田―船山―
 雄町―百間川―津島―南方―追入上東―真壁他―大宮―亀
 山―ザブ―松江下垣内―助平1号?―中山貝塚―太田川放
 水路―高井利松―大円寺山―福寺―奥正権寺―中郷遺跡の
 分布線で構成される。

枝線B

勝部田能―宮の前―摂津加茂―大里遺跡で構成される。

枝線C

東神吉―東中―家原堂の本遺跡で構成される。

枝線D

常全門前―新宮宮内遺跡で構成される。

枝線E

南方津島―原―一丁田遺跡で構成される。

枝線F

太田川放水路―塚迫青木原遺跡で構成される。

枝線G

中郷―下東―亀山―馬場杖抜遺跡で構成される。

拠点集落の間隔

分布線上における拠点集落間の平面・直線距離をおおまかに測定す
 ると、次の三つの数値に集中する。

スパンA 三〇七km程度(十七個所)

スパンB 九〇十六km程度(二十個所)

凡 例

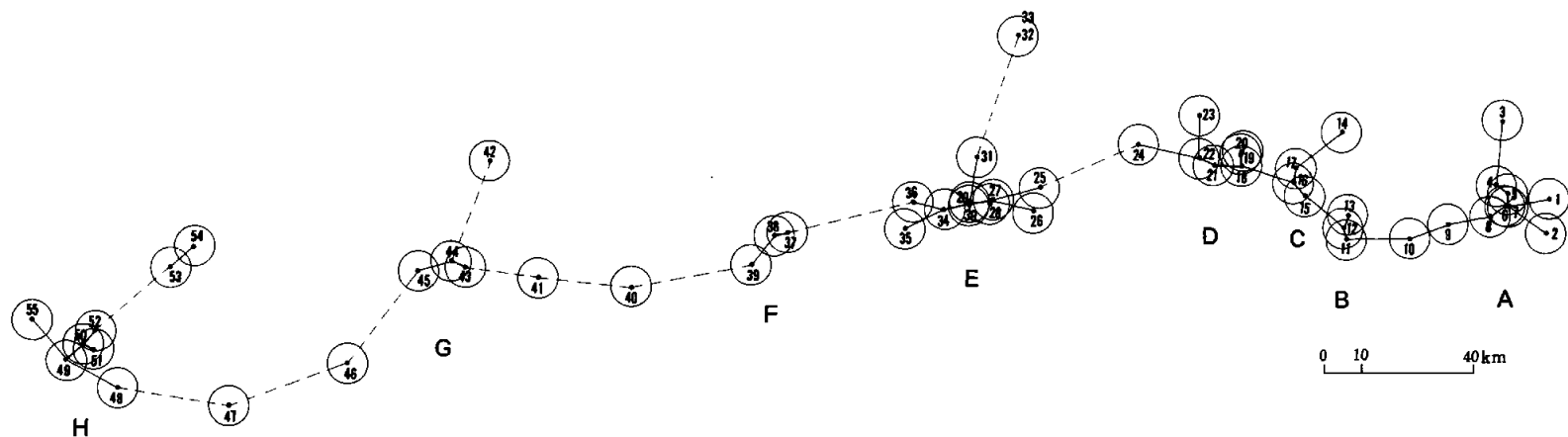
● 拠点集落として可能性のある遺跡

○ 日常生活活動の範囲(キャッチメントエリア)

— スパン A

- - - スパン B

⋯⋯ スパン C



第1図 瀬戸内海北岸における弥生時代拠点集落の分布状況

1. 東奈良
2. 森小路
3. 大里
4. 摂津加茂
5. 宮の前
6. 田能
7. 勝部
8. 武庫荘
9. 本山
10. 楠本荒田町
11. 新方
12. 玉津田中
13. 常本
14. 家原堂の本
15. 東溝
16. 東神吉
17. 東中
18. 小山
19. 今宿丁田
20. 辻井
21. 丁柳ヶ瀬
22. 常全門前
23. 新宮宮内
24. 野田
25. 船山
26. 門田
27. 雄町
28. 百間川
29. 津島
30. 南方
31. 原
32. 京免
33. 一丁田
34. 追入上東
35. 酒津
36. 真壁他
37. 大宮
38. 亀山
39. ザブ
40. 松江下垣内
41. 助平1号他?
42. 塚迫青木原
43. 中山
44. 太田川放水路
45. 高井利松
46. 大円寺山
47. 宮原福寺
48. 奥正権寺等
49. 中郷
50. 下東
51. 吉田
52. 亀山
53. 馬場杖伎
54. 坂手
55. 沖尻惣の尻
55. 旦等

スパンC 二十八〜三十三km程度(十一個所)
その他

拠点集落の集合体

五十五個所の拠点集落候補遺跡は、その分布状況から判断して、次の八個所(A~H)の集合体として整理される。

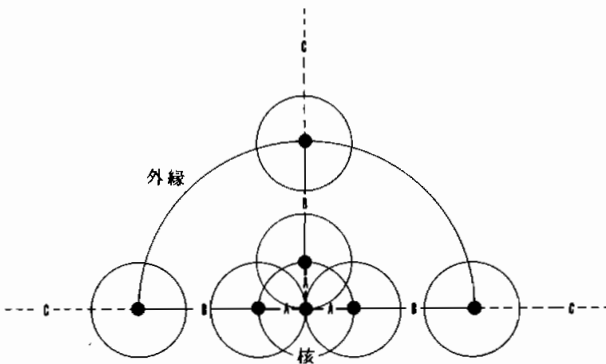
- 集合体A 撰津加茂・宮の前・田能・勝部・武庫庄を中心とし、周囲に本山・大里・森小路・東奈良遺跡が位置する集合体。
- 集合体B 常本・玉津田中・新方を中心とし、周囲に東溝・楠荒田町遺跡が位置する集合体。
- 集合体C 東中・東神吉・東溝を中心とし、周囲に小山・家原堂の本・玉津田中遺跡が位置する集合体。
- 集合体D 辻井・今宿丁田・小山・丁柳ヶ瀬・常全門前を中心とし、周囲に野田・新宮宮内・東神吉遺跡が位置する集合体。
- 集合体E 雄町・百間川・津島・南方・追入上東を中心とし、周囲に酒津・真壁他・原・船山・門田遺跡が位置する集合体。
- 集合体F 大宮・亀山を中心とし、周囲にザブ遺跡が位置する集合体。
- 集合体G 中山・太田川放水路を中心とし、周囲に高井利松遺跡が位置する集合体。

集合体H 亀山・吉田・下東・中郷を中心とし、周囲に旦・奥正権寺遺跡が位置する集合体。

地域システムの理念モデル

拠点集落遺跡の集合する八個所の集合状況を重ね合わせて地域システムの理念モデルを構成すると、次のようになる。

地域システムは、核および外縁に位置する諸拠点集落の集合で構成される。即ち、集合体の中心には複数の拠点集落が、海岸線に平行・直行する配列で、三〜七km程度(スパンA)の間隔にて近接・所在する。また、核を構成する集落の外側には、そこから九〜十六km程度(スパンB)とやや間隔をおいて拠点集落が所在し、地域システムのの外縁を形づくる。瀬戸内海北岸という地理



第2図 拠点集落の集合による地域システムの1例
(瀬戸内海北岸における理念型)

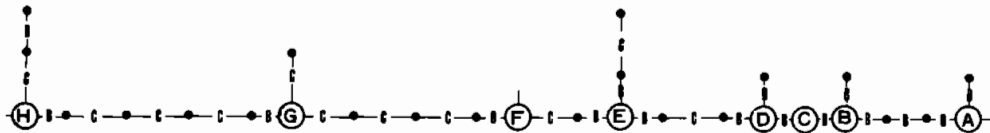
的条件から、地域システム全体は基本的に半円形をなす。

各実例をみると、集合体Eは理念形に近い構成をとり、例えば、Fは不完全な構成をとる。

地域システムの連結線

各システムの核は、次のような拠点集落の分布線（幹線A）で連結される。

- 地域システムA—B間（連結線a） 武庫荘—（十一km、スパンB）—本山—（十km、スパンB）—楠荒田町—（十六km、スパンB）—新方遺跡
- 地域システムB—C間（連結線b） 玉津田中—（十三km、スパンB）—東溝遺跡
- 地域システムC—D間（連結線c） 東神吉—（十四km、スパンB）—小山遺跡
- 地域システムD—E間（連結線d） 常全門前—（十六km、スパンB）—野田—（二十八km、スパンC）—船山—（十二km、ス



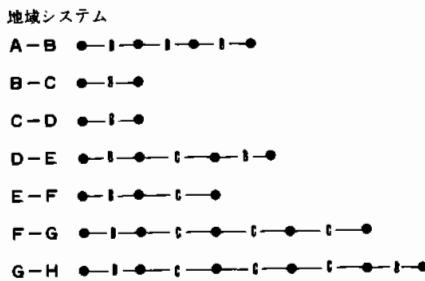
第3図 地域システムの連結状況

- パンB) — 雄町・百間川遺跡
- 地域システムE—F間（連結線e） 川入上東—（十一km、スパンB）—酒津—（三十km、スパンC）—大宮遺跡
- 地域システムF—G間（連結線f） 龜山—（十km、スパンB）ザブ—（三十一km、スパンC）—松江下垣内—（二十四km、スパンC）—助平一号—（十九km、スパンC）—中山貝塚遺跡
- 地域システムG—H間（連結線g） 太田川放水路—（九km、スパンB）—高井利松—（三十km、スパンC）—大円寺山—（三十三km、スパンC）—福寺—（三十km、スパンC）—奥正権寺遺跡

各地域システム間の連結度

各地域システムの核を結ぶ連結線上における拠点集落の間隔（スパンA・B・C）とその単位数は、次の通りである。

- 地域システムA—B間（連結線a） スパンB+B+B+B（スパンB・三単位）
- 地域システムB—C間（連結線b） スパンB（スパンB・一単位）



第4図 地域システムの連結度

地域システムC—D間（連結線c） スパンB \parallel （スパンB・一単位）

地域システムD—E間（連結線d） スパンB+C+B \parallel （スパンB・

二単位+スパンC・一単位）

地域システムE—F間（連結線e） スパンB+C \parallel （スパンB・一

単位+スパンC・一単位）

地域システムF—G間（連結線f） スパンB+C+C+C \parallel （ス

パンB・一単位+スパンC・三

単位）

地域システムG—H間（連結線g） スパンB+C+C+C+B \parallel

（スパンB・二単位+スパンC・

三単位）

各地域システム間の連結度順位

先の各地域システム間の連結度を評価すると、次のような順位となる。（第4図）

一位 地域システムB—C間 \parallel 地域システムC—D間

二位 地域システムE—F間

三位 地域システムA—B間

四位 地域システムD—E間

五位 地域システムF—G間

六位 地域システムG—H間

これらのうち、地域システムB—C間およびC—D間は、他と比較して最も強い連結関係にある。地域システムB・C・Dの三者で、より大きい地域システムを構成していると判断できる。

瀬戸内海北岸広域地域システム

瀬戸内海北岸における広域システムは、三〜十個所の拠点集落の集合体としての八個所の地域システム（A—H）とそれを結ぶ七本の連結線（a—g）で構成される。これらの連結線は、線形配列をなす八個所の地域システムを結ぶ一本の連結幹線を構成する。各地域システム間の結合には、相対的に強いもの（例えば地域システムB・C・D）や弱いもの（例えば地域システムG—H間）等、強弱がある。

人間の行動距離からみた地域システム

先にあげた地域システムの理念モデルを、人間の一般的な行動距離の観点から評価する。ついては、次の三つの基準を用いる。

日常的な生業活動の範囲

拠点集落から直径5km程度の範囲（Vita-

Pinzi, Higgs によるキャッチメントエリ

ア）あるいはスパンA（三〜七km）に相当

一日での往復可能距離

拠点集落から十五km程度の範囲

スパンB（九〇十六km）に相当（参クリスタラ）

一日での到達可能距離

集落から三十km程度の範囲

スパンC（二十八〇三十三km）に相当（参同）

これらを踏まえながら、地域システムの構成を評価する。（第2図）
拠点集落の領域 集落を核とする半径五kmの日常的な生業活動の範囲は、その集落に属する領域と理解してよいだろう。

地域システムの核

数個所の拠点集落がスパンA（三〇七km）で近接・所在するこの空間は、日常的な生業活動範囲（領域）の連結集合体として理解できる。

地域システムの外縁

核からスパンB（九〇十六km）の距離に位置する諸拠点は、核の集落と一日で往復可能な関係にあると理解できる。

地域システムの領域

核および外縁に所在する拠点集落の日常的な生業活動範囲の集合空間は、その地域システムの領域と理解できる。

人間の行動距離からみた各地域システムの連結

先にあげた各地域システムの連結状態を、同じく一日での往復可能

および到達可能距離という人間の一般的な行動距離の観点から評価する。（第3図）

地域システムA—B間

スパンB・三単位がある。両者は、一日で

往復可能な三個所のスパンを介して結ばれる。

地域システムB—C間

スパンB・一単位がある。両者は、一日で

往復可能なスパンで直接に結ばれる。

地域システムC—D間

スパンB・一単位がある。両者は、一日で

往復可能なスパンで直接に結ばれる。

地域システムD—E間

スパンB・二単位+スパンC・一単位があ

る。両者は、一日で往復可能な二個所と一日で到達可能な一個所、計三個所のスパンを介して結ばれる。

地域システムE—F間

スパンB・一単位+ C・一単位がある。両

者は、一日で往復可能な一個所と一日で到達可能な一個所、計二

個所のスパンを介して結ばれる。

地域システムF—G間

スパンB・一単位+ C・三単位がある。両

者は、一日で往復可能な一個所と一日で到達可能な三個所、計四

個所のスパンを介して結ばれる。

地域システムG—H間

スパンB・二単位+ C・三単位がある。両

者は、一日で往復可能な二個所と一日で到達可能な三個所、計五

個所のスパンを介して結ばれる。

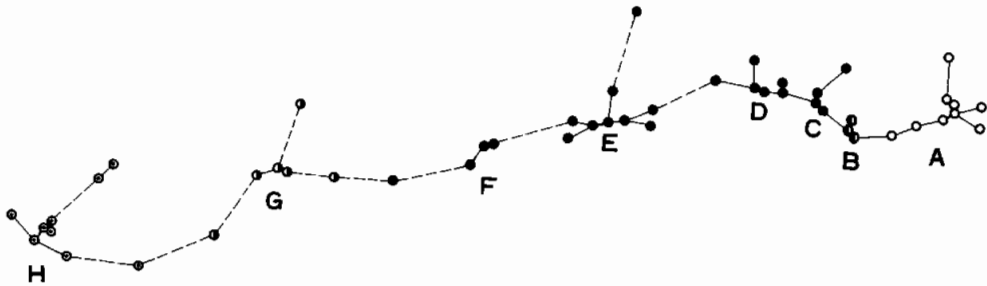
人間行動からみた瀬戸内海北岸広域地域システム

先にあげた瀬戸内海北岸広域地域システムを、同じく人間の一般的な行動距離の観点から評価する。すなわち瀬戸内海北岸広域地域システムは日常生活活動範囲の集合体としての八個所の地域システムが、一日で往復あるいは到達可能な距離・一ノ数単位で連結することにより構成される。

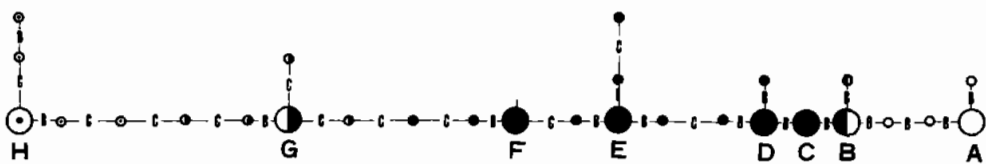
石器用石材にみた地域システムの関係

ここで、各地域で主体的に使用される打製石器用石材を例にあげ、各地域システムの関係の一端を把握しておこう(粟科他一九七八)。

- 地域システム A 近畿二上山産サヌカイト主体
- 地域システム B 四国金山産+近畿二上山サヌカイト
- 地域システム C 四国金山産サヌカイト主体
- 地域システム D 四国金山産サヌカイト主体
- 地域システム E 四国金山産サヌカイト主体
- 地域システム F 四国金山産サヌカイト主体
- 地域システム G 周辺産各種石材+四国金山産サヌカイト等
- 地域システム H 九州姫島他産黒曜石+周辺産各種石材



第5図 石材からみた各拠点集落の関係図



第6図 石材からみた各地域システムの関係概念図

これを整理すると、次の三地带に区分されるとともに、各地域システムも三グループに区別される。

近畿二上山産サヌカイト地帯 地域システムA

四国金山産サヌカイト地帯 地域システムB・C・D・E・F

+ 地域システムG

九州姫島他産黒曜石・周辺産玄武岩等地帯 地域システムH

各拠点集落の日常生活活動の範囲（「キャッチメントエリア」を大きく越えた産出地の石材の継続的な使用は、いわゆる「交易」にかかわると理解するのが合理的である。もし、この仮定が許されるならば、先の三地带をそれぞれ次のような打製石器用石材の交易圏構成体と理解することになる。

交易圏構成体A 地域システムA+地域システムB

交易圏構成体B 地域システムB・C・D・E・F+地域システムG

地域システムG

交易圏構成体C 地域システムH

このうち地域システムAは、近畿中央部広域システム全体が二上山産サヌカイトの交易圏構成体であること、およびその位置から判断して、その広域システムの基本的な一部であると理解できる。

地域システムHについても、九州産黒曜石を使用する北部九州広域システムの交易圏の縁辺の一部とみてよいだろう。

これらに対して、瀬戸内海北岸の中央大部分においては、地域シス

テムB・C・D・E・F+地域システムGにより極めて広範囲な交易圏が構成されていると判断できる。

結 論

弥生時代における瀬戸内海北岸広域地域システムは、海岸線に沿う八個所の地域システム（A-I）で構成される。各地域システムは、三〜十個程度の拠点集落の集合によりなる。その中央には、スパンA（三〜七km程度）、即ち日常生活活動範囲内の間隔で近接・所在し、地域システムの核をなす。その外側には、スパンB（九〜十六km程度）、即ち一日で往復可能な距離に拠点集落が所在し、地域システムの外縁を形づくる。各拠点集落を中心とする半径五km程度の日常生活活動範囲（「キャッチメントエリア」）の集合体は、その地域システムの領域と理解される。

隣在する各地域システムは、拠点集落の線分布による連結線で結ばれる。連結線上には、スパンB（九〜十六km程度）、即ち一日で往復可能、あるいはスパンC（二十八〜三十三km程度）、即ち一日で到達可能な位地に拠点集落が所在する。そのスパンや単位数により地域システムの結合程度が異なる。例えば、地域システムB・C・D間の結合は強く、より大きな地域システムを構成する。

これら諸地域システムの関係を把握すべく、各地域で主体をなす打

製石器用石材を例にとれば、三個所の交易構成体として理解できる。即ち、地域システムAは、二上山産サヌカイトを使用し、近畿中央部広域地域システムの一部をなす。地域システムHは、九州・姫島産黒曜石を含み、北部九州の交易圏の縁辺に含まれる。そして、瀬戸内海北岸中央部には、地域システムB・C・D・E・F+地域システムGによる大きな交易圏構成体が形成されていたことがわかる。

おわりに

以上、各地の拠点集落として可能性が考慮される遺跡資料を概観することにより、瀬戸内海北岸における弥生セトルメントシステムを仮説モデルとして構成した。ただし、なおまだ極めて粗悪な作業段階にとどまり、先学諸氏の的確な御批判あるいは新しい遺跡資料により、より合理的なモデルが再構築されていくことになる。この仮説モデルにいささかの有効性があるとすれば、当該地域における社会構成や各種生産物の移動状況、あるいは各地域社会間の相互関係の理解に若干の目安を提供することであろう。

△引用・参考資料および文献▽

岡山市教育委員会編 一九八三年『岡山市埋蔵文化財分布地図』

小野忠熙編 一九八六年『日本の古代遺跡』保育社

鎌木義昌・東村武信・薬科哲男・三宅寛 一九八四年『黒曜石・サヌカイト製

石器の産地推定による古文化交流の研究』『古文化財

の自然科学的研究』同朋社

竹内理三他編 一九八二年『日本歴史地図 原始・古代編(上)』柏書房

一九八三年『考古遺物遺跡地名表 原始・古代編』柏書房

榎本誠一・松下勝共 一九八四年『日本の古代遺跡 三 兵庫東南部』保育社

文化庁文化財保護部編 一九七四年『全国遺跡地図 三五 山口県』国土地理

学協会

一九八二年『(同)三四 広島県』(同)

一九八二年『(同)二八 兵庫県』(同)

真壁忠彦・真壁霞子 一九八五年『日本の古代遺跡 二三 岡山』保育社

脇坂光彦・小都隆共 一九八六年『日本の古代遺跡 二六 広島』保育社

薬科哲男・東村武信・鎌木義昌 一九七八年『蛍光X線分析法によるサヌカイ

ト石器の原産地推定(VI)』『考古学と自然科学 第一

一号』

クリスタラー、ヴァルター 一九三三年『都市の立地と発展』(江沢譲爾訳

一九六九年) 大明堂

木村辰男・坂本英夫・高橋正編 一九八五年『現代地理学の基礎（第二増補版）』大明堂

ゴージェ、ハワード・テーフ、エドワード 一九七三年『地域交通論』（奥野

隆史訳 一九七五年）大明堂

酒井龍一 一九八四年「弥生時代中期・畿内社会の構成とセトルメントシステム」『文化財学報 第三集』奈良大学文化財学科

水津一郎 一九八〇年『新訂 社会地理学の基本問題（増補版）』大明堂

ヘンベル、カール 一九六六年『自然科学』（黒崎宏訳 一九六七年）培風館

ポパー、カール 一九五九年『科学的発見の論理（上）』（大内義一・森博訳）

恒星社恒星閣

一九六三年『推測と反駁』（藤本隆志・石垣壽郎・森博訳

一九八〇年）法政大学出版社

西村睦男 一九七七年『中心地と勢力圏』大明堂

Flannery, K. V. ed. 1976 『The Early Mesoamerican Village』 Academic Press.

Vita-Finzi, C. • Higgs, E. S. 1970 『Prehistoric Economy in the Mount Carmel Area of Palestine』 『Proceedings of the Prehistoric Society 36』 1-37.

（付記）

この他、各遺跡についての調査報告書類をも引用・参考にさせていただいた。本来明記すべきであるが、紙面の都合により省略させていただいた。非礼をおわびするとともに御理解を願いたい。

（一九八六年十二月三十日稿）